

トルコ・シリア陸路国境越え

目次

- はじめに
- (一) 旅はイスタンブールから始まった
- ・国境越えまでの長い助走
 - ・オトガルを出る夜行長距離バス
- (二) 国境の町・アンタキヤ遙かなり
- ・夜行バス一部始終
 - ・トラブルの多いバス事情
 - ・アンタキヤ着・アンタキヤ発
- (三) 行き交う（戦いと文化）
- ・国境越えタクシীরサイドビジネス（その一）
 - ・トルコ出国検問所
 - ・長い国境緩衝地帯

- (四) シリア入国検問所と係官の不思議
- ・シリアの素顔
 - ・アレppoの収穫
 - ・イスラム教徒・老人の威厳
 - ・寄り道（カラート・サマーン）
- (五) 国境越えタクシীরサイドビジネス（その二）
- ・シリア出国・国境検問所前後
 - ・再びトルコへ
 - ・神経質な旅券検問——
- (六) 「国境越えの旅」の終点
- おわりに

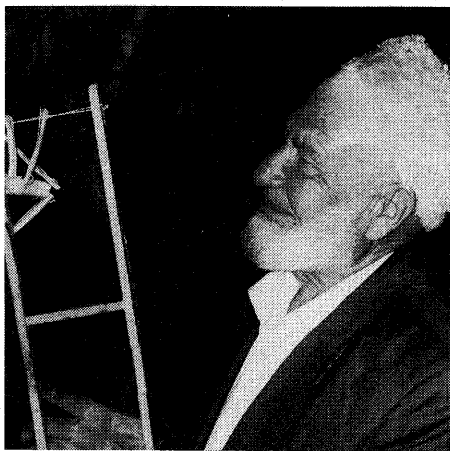
中 谷 陽 子

はじめに

われながらその捕えどころの無さに苦悩しながら、私は「人間はどのように遊んできたか」というテーマに長らくかじりついてきたのである。九七年秋、地理学者のK、化学者のNと連れだって私はトルコのある大家族の農家をたずね、親から子へと伝承されていく家族の絆を取材する旅に出たのである。

シリアへの陸路国境越えは、旅のエクストラと言ったらよいだろうか、直前になって旅程に飛び込んできた挑戦である。旅人三人三様の強い好奇心を満足させるために心を砕いて旅を粘ってきたK氏(*)が、旅の一ヶ月前に京都・比叡山で開催された「世界宗教者平和の祈りの集い」に参加するため研究拠点のカイロから帰国し、その際にシリアからのキリスト教司祭から招待されたことから私たち三人のシリア訪問が実現したのである。Kはシリア入国ビザを取得すると再びカイロに帰ってしまった。そして一ヶ月後私たちはロンドン経由で、Kはキプロス(必ずしも仲が良いとは言えないギリシャとトルコで島を二分する)経由、船で旅の出发点イスタンブールにやってきた。

*小谷野晃氏。地理学博士(アレキサンドリア大学)。宗教学・アラビヤ語の研究者でもあり、一九九八年十二月「古代エジプト・都市文明の誕生」(古今書院)が最新著書である。



孫に玩具を作るトルコの知人、アル・バル氏

(一) 旅はイスタンブールから始まった

深夜のイスタンブール空港で再会を約束していたが、互いに姿がない時は日本の実家を連絡場所に指定するなど、はじめから旅は柔軟と悠悠の心構えと言えは様になるが、予想のつかないという方が的を得ている。総じて簡潔、観察と予測、行動と記憶、健康とスピードこれらが旅の基本で、それに加えて先に記した柔軟と悠悠、そして好奇心と人間好きが旅のコツである。

相互に日付とフライトだけの情報で落ち合い、深夜予約のホテルに投宿した。ちなみに宿賃に触れると私の場合シングル六十ドルを四十ドルに値切った。朝食付き風呂トイレのある三つ星級。Kは大体駅前の十ドルぐらいを常とし、一般にバッグパッカー達は大部屋二ドルぐらい。「毎回日本に帰るとバカらしくなる」と口々につぶやきながら短い眠りについた。

● 国境越えまでの長い助走

トルコでの取材の前に何をおいてもシリア行きを優先させ、国境へと突っ走ることになったが、それはまるで陸上競技の走り巾跳びが長い助走期間を全速力で走って跳ぶのに似て、イスタンブールを発ち広大なトルコの西半分を斜めに突っ切って、シリアとの国境の町アンタキヤ (ANTAKYA・HATAY) まで千二百キロの道のりを一気に走るというものであった。

長距離バスは夜間を利用して走るため、イスタンブールの初日は市内観光をして時間待ちをした。前述のようにこ

の旅は健脚であることがモットーなので、私たちの市内歩きは一般の観光客の二日分を消化したと評価したい。コンスタンチノープルの栄光を想起しながら、最高に美しいイスラム寺院・ブルーモスクやオスマン帝国の財力・権力を物語るトプカプ宮殿、権力と宗教にもまれながら長い歴史を今に物語る聖ソフィア大聖堂などをしっかり見物した。また人々のざわめき合うガタラ橋附近を歩いて、ボスポラス海峡を眺めながらアジアとヨーロッパの文明の混ざりあうといわれる雰囲気を感じ取ろうとした。歴史を知るうえでは数々の博物館歩きは欠かせないが、これは帰途に残した。興味深いのは市場である。中東一を誇る大バザールの他に元来香辛料市場であったエジプト・バザールは連れのNを喜々とさせた。私たちは取材の旅先ではいつも、相互に相手の為に記録用のビデオを回した。

●オトガルを出る夜行長距離バス

夕日が映える頃長い一日が終息し、待望の長距離バスターミナル(オトガル・AUTOGAL)へ大トランク数個(これが国境越えの際に役立つ)を持ってたどり着いたのである。とにかく大きなターミナルで、その一角にはホテルやショッピングモール、レストラン街が並んでおり、まさにここから旅が始まるという気分になる。巨大円形バスターミナルは、トルコ語の文字看板を揚げたバス会社が数百軒も肩を寄せてひしめき合い、各々が行先別の窓口を開けていて実に壮観である。ターミナルの内側はバスやタクシーがひっきりなしに入ってくる混雑した到着ターミナルで、ずらりと並んだ建物のオフィス(事務机のある待合い席と呼んでもよい)を通りぬけて奥へ出てしまうと、そこは見上げるような大型デラックスバスがズラリと放射状に並ぶ壮観なバス発車ターミナルとなって広がっている。

Kがアンタキヤ行きのバスチケットを探し行くのを荷物番をしながら見送って、その姿を追っていくと、ある店の

中に消えたかと思うとまた現われて再び消える。その後姿がどんどん小さくなって行くのだから、バスターミナルの巨大さが分かる。安穩と待ちながら「でも個人旅行の場合、アラビヤ語やトルコ語に通じていなければとてもこの中から道は開けられない」と痛感した。Kが紙切れをヒラヒラさせながら走って戻ってきて、バス会社が決った。ひとまず事務所内に荷物一時預かりを頼み、夕食を求めて外に出た。旅立ち前の食事は別に急ぐ理由もないので一寸期待したのだが、どこも一様に殺風景な店構えで簡単な料理ばかりで少々口淋しかった。

バス待合い所に戻ると皆に「チャイ」（小さいグラスに入った甘い紅茶）が振舞われた。大きな荷物にもたれて眠る人も居るが、ひと目で観光客と分かる乗客は他にいなかった。バス車種はベンツ製ハイデッカー車で乗心地はよい。私たちは始発点から終点まで全行程を乗るわけで、料金は三百万トルコリラ（TL）、約三千円である。

（二）国境の町・アンタキヤ遙かなり

●夜行バス一部始終

バスは夜九時三〇分にうねるような感触で混雑したターミナルをぬけてゆっくりと出発した。間もなく高速道路に出た為左右には何も見えず、乗客は寝入り、日付が変わって行った。翌朝は五時すぎに空が白み、薄明かりの中に牧草地が広がり時折羊の群れを見る。野火も何回となく見うけた。

朝六時半頃バスは二回目の休憩に立ち寄りそこで軽食を取る。休憩所に限らずトルコ国内のトイレ事情はほめられるものではなかった。水洗は詰まり水は枯れ、使った人は必ず「私の前の人もその前の人も……」あとはジェス

チャーで困ったものだという風に言葉を送りをする。結局バスは計十六時間の道のりに、三回の休憩をとった。

バスの走行はイスタンブール——アダナ間九百五十km、さらにアンタキヤまで百八十六km、それに市内を加え合計千二百kmを十六時間かけて走りぬいたが、休憩時間をカウントすると時速九十km位で走ったと思われる。(日本の高速バスはもっとスピードを上げる。)

乗客の中にウクライナから出稼ぎに来ている四人連れの女性がいた。うち三人は若い美人で終点より手前の賑やかな町で下車して行ったが、荷物は舞踊衣装の入った巨大な袋が四個であった。陽が昇り車内が熱くなると同乗しているサービスボーイが乗客に化粧水の瓶を持ってまわってくる。両手のひらにたっぷりもらって顔や首、腕などにピシヤピシヤとつけると香りよく涼しい。ウクライナの踊り子だけには幾度となく香水を運んで来て、ついでに飲物やパンを差し入れて行くのが滑稽だった。バスは大都会から遠く離れた人々の生活乗物であり輸送車でもあった。肩からかける袋一個持って下車して近くの岩かげに姿を消す人もいれば、一メートル立方の箱一ダースをバスの腹部のキャリアから引き出し迎える車に積む人もいる。人々の年齢判断だが、『見かけの年齢マイナス十五歳』と教えられたが総じて老けて見える。兵役(トルコでは義務)に行けば苦勞する人もいて、特に赤ん坊を抱いた父親に会うたびに髭を蓄えた中東の男性の年齢^{とし}当てに興味を抱いた。

もうひとつ興味深い話だが、岩がゴロゴロと続く荒地によく羊飼いの姿を見うける。不思議なことにどの人も背広姿である——アラブの男性達は野良で働いている時も背広を愛用し、それが独特の帽子と調和していて興味深い。

山を越えると平野が広がり、果てしなく綿つみ風景が続く。次第に畑が現われ始めるが灌漑がなされていて、人里が近く感じられる。トウモロコシと直径五十〜六十センチにも見える巨大キャベツが交互に植えられている。

●トラブルの多いバス事情

ひとつはパトカー事件である。言いかえればバスのスピード違反で、二回目と同じパトカーに注意された時に罰金を支払った。運転手は自分の財布から大声で怒りながら金を出して渡し、ガミガミ言いながら握手をし、パトカーの係官はその場で現金を受け取るのだから、何やら気になる光景であった。

もうひとつは故障バスである。快調に走って行くと前方に停車中のバスが見え、多勢の乗客がバスを降りて路肩にしゃがみ込んでいる。わがバスは少々行き過ぎてから止り、助手が事情調べて走る——故障したけれど連絡手段がなくて立ち往生中だと分かる。我バスは備え付けの携帯電話で連絡をした途端にもう走り出していた。荒れ地の中に置き去りにしたという印象が残るが、ここではないかに多くのバス会社が性能のよいバスを求め、競争にしのぎを削っているのが分かった。何台ものバスを追い越しまだ逆に追い越されもした。危険をおかしてもバス同士がはげしく競争する様は、出発ターミナルの数百を越すバス案内所の光景を思い出せば合点が行くが、それにしても怖い追いぬき合戦である。

(三) アンタキヤ着・アンタキヤ発

バスは午後一時すぎアンタキヤに到着。所要時間約十八時間であったが、長旅とはいえ終着の幕切れはあっけなかった。全行程を乗った者はわずかで、降りるとすぐにバスは路上に私たちの荷物を残してさっさと姿を消してしまいい、妙に次の行動に追われるような気忙しさを感じた。

● 行き交う (戦いと文化)

ここではトルコとシリアが混在、つまりアラビヤ語も日常的に使われており、Kは流暢な言葉使いで次々と交渉を進めた。まず旅の後半、つまりトルコ取材に必要な荷物を持ってシリアに入国するのを懸念して、預かり主を探すことにした。アンタキヤも当然のことながら大きなバスターミナルを抱えており、その真中に構えているレストランを選んで荷物預けの交渉をしたところ、快諾してくれた。トルコは地方へ行く程人々は親切で、その振舞いはごく自然であった。長旅のあとでは空腹感より疲れが先行したが、行動をモットーとする旅であるから日の高いうちから休息するなどという甘えはない。とりあえず腹ごしらえを済ませるべく、ポピュラーなアラブ・ファーストフードを注文する。シャワルマ、モロヘイヤ、赤トウガラシそしてホプスなどがステンレスの丸皿にあふれ落ちる程盛られてきて、地ビールで乾杯。

* 昼食で食べたアラブのファーストフード

シャワルマ (トルコでは、ドネル・ケバブ)

〔薄切り羊肉を芯に巻いて固めた高さ五十センチのかたまり肉を回転させながら焼き、大きな刀で削るよう
に切り取って皿に盛る〕

ホプス (直径二十センチの平らなパン)

モロヘイヤ (粘り気のある緑野菜)

赤トウガラシ (二十センチもあるしサイズ。辛好き人間むき)

さて国境附近には混ざり合う文化と反対に警戒の臭いが漂う。軽食を取りながら二階にあるレストランの窓越しに

見下したバスターミナルでは、想像するに多分「兵役」に行く若者を見送る家族・友人と思われる多勢の人々が、ゆっくりと動き出すバスと一緒にゾロゾロと移動する。三十人以上はいると思われるが、その見送りの言葉は聞こえてこない。

昼食後KとNが国境越えの乗物の手配をしている間に私は、バスターミナルの光景を間近に見ようと発着所近くに行き数枚の写真を撮ったとき、背後で鋭い声（トルコ語で）がした。振り向くとトルコ軍隊の警備兵が近づいて来る。当然のことながら私の撮影に対する注意・警告だと想像して困惑の気持が走ったが、気を取り直して自分の方からもこの威張った男性の方へ数歩近づいた、こんなにちはの気持になって。するとジェスチャーから「自分を撮れ」と言っていることが判明したので、私は張られたロープの外へくぐり出て程よい距離まで近づいた。五メートル後方の幌つきジープを指してさらにポーズをとるように勧めたところ、実に喜んで格好をつけて（髪をなでてヘルメットをかぶり直し、腰にまわした白いひもを確かめ）私の記録写真のモデルに収まってくれた。ヘルメットとジープには“ASIN”と書かれていた。友情撮影の背景には、しかしトルコ対シリアの緊張感をおぼえずにはいられない。通常の国境警備以上に、両国が各々に抱える政治的課題やアラブ諸国の昔からの同胞でありながら解決できない不安要因が存在する時代の国境とは、一体どのようなにして私たち旅人を通してののだろうか。陸路国境越えが目前に迫り、私の中の好奇心が膨らむ。

●国境越えタクシーのサイドビジネス（その一）

陸路で国境を越える際の交通機関はバス・乗り合いタクシーそしてタクシーであるが、私たちの旅の特徴からして

自由に使えるのはタクシーである。Kはバスターミナルの一角にあるタクシー会社へ掛け合いに行き、間もなく一台のタクシーが乗場へやって来た。車体は黄色で線や文字が書かれている。毎日のように国境を往復しているとはいえ、うまく国境を越えて行かれるかは運転手の腕次第であるから、思わずドライバーを頭からつま先まで観察した。小肥りでいかにも上手に客扱いをするジェスチャー、年齢は「見掛けマイナス十五歳」の方程式に従うと四十歳位。立派な髭を貯えているが笑うとぬけた齒跡が見えて「苦労しているな」という感じが伝わって来る。料金の交渉はタクシー小屋の窓口で会社・ドライバー・乗客の三者で行われ、アンタキヤ(国境)アレppo (Aleppo: シリア)の市内の教会堂前まで片道約百二十キロ余りを八百万トルコリラ、約八千円(チップぬき)となり、支払いを済ませた。次いで私たち旅人三人のパスポートを提示し、これで万事オーケーとなり、午後の時刻も気になることだし一気に国境へ走り出すものと思った。

タクシーは程無く軒並みシャッターの降りた余り景気の良い気配の問屋街に入りある店先で止った。私たちは車中で待っていると、ドライバーは車のトランクを開け、何やら積み込んでいる。トランクの蓋がはねあがっているその様子はよく分らないが、時々車がゆさゆさと揺れる。ドライバーはお世辞笑いをしながら戻ってきて、百メートル程走ってまた止った。この時には勘の悪い私でさえタクシードライバーのサイドビジネスである事がわかったのである。折から靴磨き少年が通りかかる。大人の場合とは逆に四、五歳幼く見うけられる。手製で重い道具箱に三万TL(三十〜四十円)と書いてあるが、子ども達はどこで見かけてもよく働いている。私は興味津津でドライバーの後について車を降りた。彼が入った店は菓子類、乾燥食品、生活雑貨店を扱っており、小さな三角国旗をぶら下げたガラス戸越しにのぞき込むと目の鋭い商人がキュッと笑ってみせて、私に風船ガムをひと粒くれ「あれがそう

だ」という風に棚の上に積みあげた箱を指した。ドライバーはここでビスケット(A)・(B)、おしゃれ石鹼、ガム、箱ティッシュ(六、八個)を買いながら私に「税関通過用のみやげ品だ」と言った(混って使われる単語で理解できる)。買物品を無造作に車のトランクに詰める時も私は子どものようにガムを噛みながらウロつき、トランクの中身を盗み見しようとした。

まず油缶が幾つも見える。トルコの綿実油は安価だそう。シリアではオリーブ油がとれるが値が高いうえに癖のある匂いのために人々は綿実油の方を好む。また油は酸化するので、こまめにトルコから運び込むことが好都合だという点が商品として選ばれた理由であろう。前の店で買ったのは油であった。さらに私たちの荷物の下には何か相当量の物が縞模様の毛布で隠されている。しかしちょっと毛布をめくれば何もかも見えるようにしてあるあたり、税関通過時にテーマになりそうなところである。菓子類やおしゃれな箱の石けんやティッシュはどこで、また相当量の重そうな品物は一体どこで吐き出されるのだろうか。

(四)トルコ⇨シリア国境越え(往路)

さてタクシー料金交渉の際に片道百十〜百二十キロメートルとしたが、双方の国境に近い大きな町アンタキヤとアレppo間を地図上で測って割り出した距離である。その百二十キロの道もさらに町と国境まで、両国境の中間地帯から成るので正確な距離は自らハンドルを取って計測器を見なければはっきりとしたことは言えない。精密な地図も手に入らない中で、時速と所要時間から推測したものであるから不正確な点はお許しいただき、資料があれば是非ご教

示をお願いしたい。

アンタキヤの町をはずれて国境ゲートまでの道々のはどこかで平凡な風景であった。乾燥した荒れ地が見わたす限り続き、一般の民家はすでに見当らない。綿摘みの最中で、あちらこちらにベドウィンの大きなテントや綿花の収穫された大袋などが車窓から見える。この光景はシリア側でも見られる。多くのベドウィンが季節労働者として綿花を摘み、子ども達は学校に行けずにそれを手伝う。シリアの綿花は大量にトルコに持ち込まれているという。大型トラックの往来に混ってかなり中古車のわがタクシーは懸命に走り、誰も彼もが無口になった。

●トルコ出国検問所

荒地と綿花畑を左右に見て五〇キロ程で出国検問所に着く。地図上には近辺の地名を〔Çirægözü〕と記してある。最初に立ち寄った建物ではタクシードライバーだけが手ぶらで小走りにオフィスの中に消えた。ここではまずタクシーだけが出国手続きをし、料金を支払ったかどうかは分らないがみやげ物が必要だった気配はない。余り待たないうちに彼が戻ってきて、車はゆっくりと次の建物に近づき検問ゲートに差しかった。制服の係官数名が歩み寄って、タクシーに乗ったままの私たち旅人三人のパスポートを改めるが、パリリと見て写真照合をし次の瞬間には合図があつて無事タクシーごと通過したのである。

つまりトルコからの出国に際しては、一般個人の旅人は荷物改めもなく形ばかりの旅券提示でもって通過した訳で、タクシーも全く同様に出国したことになるのであろう。

●長い国境緩衝地帯

陸路で国境線を越えるとき、両国関係がどのような状況にあるかを感じさせる手掛りはいろいろあると思われる。旅案内書には、トルコとシリアの国境検問所は七ヶ所あると記されているが各々についての情報はほとんどない。現時点のトルコ・シリア関係また中東アラブの政状を考えれば、私たちが通過したCilgözü地方の検問所が最も無難だったと言えよう。シルクロードの要図の中には、地中海沿いにトルコ・シリア砂漠の縁を通過してエジプトに向う主要道があるが、その途中にはアンタキヤからアレップまでの内陸に向う太い道も描かれており、国境線の引かれる以前にこの二つの都市は古い繋がりを持ってきたことがよくわかる。今自分達は長い緩衝地域を走っているが、古くからの歴史的見地に立つことが出来れば難題はなさそうな気がして来る。

Kが「路」というトルコ映画の話をしてくれた…この国境中間地帯でパスポートを紛失した男の話である。不運にもトルコとシリアは仲が悪く、どちらに行ってもこの男性を入国させてはくれないのである。仕方なくこの緩衝地帯でカフェテリアを開いてその後の人生を送ったということである。「へえ」と言うところには有名な映画ですよ!!」という若いKの言葉が私の耳奥まで響いてきた。「帰国したら是非探してみます」と言って、その後言葉通り探したが未だに見つけられない。どなたでも情報を下さる方がおいでならと心待ちにしている。中間地帯だというのは左側は小高い丘になり右側には誰が耕しているのか畑が広がって、不思議な光景であった。突然丘の上に二基の見張り台が見えてきて、これはトルコ側のものだと言った。道は一方通行で、両側に鉄線を張った柵が高く並び岩がゴロゴロとむき出しになっている。カメラを構えた途端に制止されたが「ハイ、分りました」と返事する間に三枚撮った。鉄線は横に十三本がびしりと張られ、見張り台の上では国境守備兵が構えていて、それらのずっと遠景には緑

豊かな農地が見えている。多分この国境緩衝地帯は緑の中の小高い山を切り裂いて、その真中に往復二本の道を作り検問しているようだと思像してみた。一〇kmほど走ったあたりからいよいよシリア門が視界に入ってきた。

●シリア入国検問所と係官の不思議

検問所に差しかかるとまずはじめにドライバーが独りで降りて裏手から建物に入って行った。車内から振り返ってみると、手に箱状の品々を持っている。すぐに戻って車を少し発進させ、今度は入国パスポートコントロールオフィスの前に止めて私たち旅人だけを降ろすと車ごとどこかへ行ってしまった。入国旅券検問所のオフィスは実に殺風景で、入国の手続きをする為のカウンターがあるだけで、他にはポスター一枚ないという簡素型である。手続き用紙は使用言語別で二種あり、Kはアラビックのものに三人分記入しビザ付き旅券を提示した。私たち旅人の入国手続きはこれが全てであった。その時偶然大東文化大学二年生の男子学生が現われ、お互いに驚いて挨拶を交わしたあと、彼らはKにアドバイスをもらいながらイングリッシュのフォームに記入した。彼らはその後バスに乗ってダマスカスからヨルダンに行くといって、炎天下のバスターミナル（といってもバスの姿は全く無い）の行列に加わって行った。

私たちは建物を作る日陰に身を寄せて暑い陽ざしを逃れながら、なかなか戻って来ないドライバーを待った。パスポートコントロールを通過してシリアへ入国できた為に気分が落着いたせいとか、周囲を見廻すゆとりがでてきた…国境のあたりではトルコ側に大型トラックやトレーラーがズラリと並んでシリア入国を待っている。積荷は見えないが車輻の様子から資材、電気製品、オイルタンカーも含まれ、各種生活用品なども想像される。韓国製の車が多いということである。車輻がシリア側に入国したあとはさらにどこへ流れて行くのか不明だが、国境周辺が戦争のあとのア

ラブ諸国へ向う多くの大型車輛で賑わうことには、いろいろと解釈がなされてよいと思う。

その時の光景には一般のバスの姿は見当らなかったが、このルートにはかなりのバスが運行している筈である。特殊な事かも知れないがイスラム教メッカ巡礼の道筋でもあって、小巡礼の旅は時期を問わずいつでも行われている。

サウジの聖地メッカへ世界各地から二百万人もの巡礼者が移動するときには、トランジットビザを持った人々が陸路・空路で集中するそうで、バスは路線を変更して総動員され、このような国境はバスで埋め尽されるという。二百万人ものイスラム教徒が、またインドでは七百万人ものヒンズー教徒がひと筋に神々の住む神殿に集まってくる光景は、私たち日本人の想像を越える圧巻としか言いようがない。

相当待ってドライバーが戻ってきた。お互いに「やれやれ」と口にしなから車動き出し、最後のゲートに差し掛ったときドライバーは車を止め体を回して私たち旅人にむかい「制服の係官がアレッポ市内まで同乗するけれどよいか？」と許可を求めてきた。よいも悪いもそう決めてきた訳で、程無く税関係官ひとり（男性で三〇歳代後半か）が助手席に乗り込んで来た。その男性の為に私たちは狭い後部座席に三人詰めでギューギューに坐るはめになり、その先六〇kmの旅を思うとうんざりした気分になった。とにかく今度こそシリアに足を踏み入れたのだから係官のことなど無視して旅のモットーたる悠々と好奇心の精神で行こうと思った矢先、タクシードライバーは発車の直前に私たち旅人の目の前で自分の手持ちの札を何枚か手渡したのである。やっと車は動き出したが今度は係官が制服の胸ポケットのボタンをはずして、中から札束を引っ張り出した。助手席に坐っている人間の動作が一部始終見えるのはこちらが覗き込んでいるか相手が見えるように仕向けているかのどちらかである。男は体を少々ひねって札束を広げ、一枚ずつ皺を伸ばし上下の向きを揃え始めた。私たち旅人は呟いた——「あゝ何だよ。今日一日の取り分だろう」、「ま

た何で後に見せるような位置で数えたりするんだ?」「この国はまだまだこれが続くんだろ?」言葉は通じなくても誰もがこの会話の意味を同じく想像したに違いない。係官の少し瞼のふくらんだトロンとした目つきの顔は、いつどこで会っても思い出せる。

ボーッとしながら車窓から見えるシリアの田舎の風景を眺めていたが、本当はこんなに無感動な気分ではなかったのだ。真っ黄色の瓜が畑一面に生るさまや灌漑用のU字型ブロックや黒くて太いホースが、今は給水期ではないようで干からびているが、果てしなく道に沿って続く光景を目で追った。アレppo (シリア第二の古代から続く都市) の町の入口あたりでその男はさらにティッシュ箱三個人入りの袋をみやげにもらって、無表情のまま車を降り夕方の人混みの中に消えて行った。家には幼い子どもが三、四人待っていると、車中で唯一口にした話である。

(五) シリアの素顔

シリアへの旅の目的は多多あり、アレppoに泊滞在は多忙を極めたが、健脚を以てして挑戦した。その内容は次のようである。――①陸路国境越えをすること、②京都にてシリアの司祭から受けた招待に有難く応ずること、③難攻不落の城塞といわれたアレppo城とその完璧な美を誇る城門に触れること、④シリアの古代史を学べる考古学博物館に行くこと、⑤石屋根の下に迷路のように広がるスーク(市場)にてシリアの人々の生活に触れること、そして⑥帰途に、五世紀に建てられた世界最大の教会・カラート・サマーンを訪れること。

四千年の歴史を持つ都市アレppo (Aleppo) の一角には十九世紀末にトルコから逃れてきた人々が成したキリスト

教徒地区がある。古い歴史の中で多くの人種が行き交って残してきた多彩な宗教・宗派が生き続ける、歴史学者注目の地である。宗教と政治の力関係はいつの時代にあっても難しい課題であるが、友人として招き快く宿を提供して下さったカトリック系教会の安らぎの中に身を置いてあらためて周囲を見廻してみた。教会は熱心な信徒と共にコミュニケーションを作り、存在感の大きいイスラム教の国にありながら自分たちの信ずるところに沿いながら堂々と生活を営んでいることがよく分かった。

●アレppoの収穫

シリアの人々は、民族意識が強く、その伝統的な生活様式をどこまで変えずに保持して行けるかは大変興味深いことである。私たちは今なお堅固に残る史跡を歩き、博物館で歴史の証言を見出しそして市場（スーク）で人々の生活様式に触れて歩いた。私たち旅人三人は各々の関心事の視点からシリアを見つめるうちに、誰もがここにしばらく滞在して自分の五感からシリアを十分に吸収したい衝動にかられた。私にも思いがけない収穫があった。「人はどのように遊んできたか」に関わる古い証拠がアレppo城内の博物館や考古学博物館に無造作に置いてあり、二千年、三千年の時を越えて文明の証しの宝庫に飛び込んだ事に変え感激した。詳述するのは別の機会に譲るとしても、例えば高温多雨の地域で木材や木の実、浜辺の貝殻などで作られたゲーム道具の起源が中東の乾燥内陸地において、石の文化として誕生していたあたりの資料は興味深く、数百kgもある巨大石ゲーム盤に触れると二千年以上前の人々の息づかいが甦るように思われた。

市場ではトンネル状の迷路のような道を沢山の驢馬達が縦横に走りまわって、重い荷物の運搬役を果たしているが、

数千年変らぬ光景だろうと思うとこれまた昔の絵からぬけ出したかのように民俗衣裳で生活する人々の姿と相まって、シリアの人々の強い民族意識と伝統を重んずる生き方に崇高さすら覚える。アラブ諸国における民族の戦いは、実に当然そうなることと証明された気分浸った。市場はただ商うというだけでなく、そこで物を作っており、その人間が手作りした豊かさを脈々と商ってきたのである。そこでは職人技を修業中の多くの少年達が居て、カメラを向けると本当に誇らしそうに自分の作っている物を見せてくれる。店主にひとつ質問すると周囲から多勢の人が集まってきた、口々に自分の知っている事を教えてくれる。親切で素朴で、生々している。プラスチックや情報化時代の産物とは縁のない、大昔から脈々と受継がれてきた暮し方と人々の情愛がそこには満ち満ちていたのである。

司祭と別れの朝食中にトルコのタクシーが迎えに来る。三日前に私たちをシリアに運んだタクシーが約束通り九時きっかりに現われた。八時には門前に来ていたというので、多分昨夜のうちに来ていたに違いないということになった。国境を越えての迎車に快諾した裏には、例え乗客はなくても例のサイドビジネスだけでも越境できるのだと皆で想像した。

教会では私たちに宗教的な質問や特別配慮、義務等はなく、親しい友人として扱われ、心地よい二泊の宿を提供してもらった。偶然結婚式も垣間見たし、司祭との二度の食事中に教区の人々の教会を軸に結ばれた暮し振りの話も聞くことができ、私たちはお礼の献金をし、司祭の「もう一度日本に行きたい」という言葉を背に別れを告げ、再び国境越えに挑戦となった。

●イスラム教徒・老人の威厳

アレツポの町はすれはもう荒涼とした乾燥地となつて広がり、行き交う車がなかったら心細い限りである。このあたりではオリブの樹を育てるのさへ大変だそうである。その昔の交易の道を延々と走りながらタクシードライバーは「この車のタイヤはすり減つて丸坊主だ」といって舗装の悪い路肩部分を避け、道のセンターラインを越えて走るものだから、頻繁に大型の対向車から警笛を鳴らされる。往きは税関係官を乗せ、帰路は衝突に怯えて私などはこの国境越えタクシーにはすっかり疲れてしまったが、悪路悪車に構わず稼ぐしたたかドライバーには脱帽である。

タイヤの苦情の次は「ガソリン」である。トルコでは価格が高いためシリアで給油することを見越して走ってきたので、そろそろタンクは空だカラという。荒野の直中でエンストされたら大変と思つた頃に、砂漠の中の一軒家・ガソリンスタンドが現われた。それと分かる広告塔が立つでもない装いは無競争社会のゆえか、素朴な風景である一方、ドライバーの言動はすべて計算された揚句のことですべり込むように給油に立ち寄る。

とりあえず下車して見廻すと粗末な給油所のうしろに石造りの家が堂々と構えている。総大理石模様だが、戸口に置かれた三mもの巨大大理石ベンチ共々、本物造りに驚かされる。見ると石のベンチに何枚もの厚座布団やクッションを置いて一人の老人が悠々とした雰囲気で坐っている。周囲には孫息子とおぼしき子どもたちが甘えるように寄り添い、折から顔を出した若主人と合わせて男性三世大家族である。砂まじりの風が絶えず吹きつける中でこの安らいだ男たちの風景に魅力を感じた私は、ゆっくり近づいて老人に敬意を込めて挨拶のお辞儀をした。老人は私を見るとイスラムの装いのジャマダーニ（白布のかぶりもの）を直し、ブリムと呼ぶのか輪状の帽子を取り出してかぶってから笑顔で私に坐れと言ってくれた。男の子たちの行動からも伝統的に長老を中心にしたイスラムの男性社会を感じ、またその礼儀正しさに感じ入った。勧めのままに老人と並んで分厚い座布団の上に腰をかけて、持ちあわせた日本の

キャンデーを子どもたちと分けあっていたら、折しも給油に立ち寄った荷馬車かと見間違う木枠のはまった小型トラックからも素足の男の子がとんで来て加わった。場はすっかりなごみ、Kが彼らの年齢を尋ねると六・十・十四歳だった。老人はキャンデーのお礼だとジェスチャーして、私にピンク色の生のビスターチを次々と殻割りしてくれた。去り際に窓から見えた屋内には食べかけのパンがころがり、そまつな寝所と砂まみれのゴムぞうりだけで、子ども達は商いのほかにどのような教育を受けられるのだろうかとその将来が気掛りである。

●寄り道（カライト・サマーン）

街道から逸れること十km余りの所にある「古い寺院跡」へ寄り道することで交渉が始まった。何としてもチャンスを得たい旅人と渋々のドライバーとは、結局チップを弾むことで合意した。三日前の往路にはあのしぶとい係官が同乗していたし夕暮れが近づいていたので「帰路には必ず」と約束したにも拘らず拒否する理由は、一刻も早くトルコ側にもどって今日中にもうひと働きたいのである。一日に二往復の勘定になる。車の調子が悪いとかガソリンが減る等と理由を並べたが、決まれば時は金なりで全速力で走った。

殺風景な野原の中に聖シメオン教会跡がこつ然と現われる。五世紀頃北シリアの全ての道がここに通じたと言われる大教会跡であるが、十字軍の時代にはさらに強固な砦も設けられたギリシャ建築の遺跡である。その史的背景は書物の記載を読むこととし省略するが、保存状況は驚く程良好でその美しさ・壮大さには本当に圧倒される。しかしかつての聖地や戦国時代の砦の威厳も今は遠くに去りただ荒涼とするばかりであるが、シリア国内の都市からは遠く離れ、またトルコから国境を越えてやって来るのも大変なことから片田舎にあって観光客も研究者も入りにくく、昔の

面影を残したままひっそりと息づいている。私たち旅人はあらためて魅了され、ここに立ち寄れたことに大きな満足感を覚えた。しかし果たしてこの歴史的遺産にしてみてもいつまでも開発の波から逃れることはできないだろう。研究者は入っているのだろうか、盗難対策は立てられるのだろうか、まさか壊されることはないだろうが——。すでに大掛りな道路工事の現場を時折見かけたし、乾燥地対策の水道も入ってきている。今のところは遅々としているようだが近い将来このあたりは一変するだろうと地理学者のKはこの地域の変貌予想を述べてくれた。

● 国境越えタクシースのサイドビジネス (その二)

帰路の車のトランクには私たち旅人の荷物だけが収まっていた。シリア出国の国境に近づく途上でタクシースは一軒の商店に立ち寄った。ここで記憶をたどると、トルコからシリアに持ち込んだ筈の多量の油缶などがどこで消えたかはこの商店に結びつけると答えが出る。アレppo市内で私たち旅人を降ろしてトルコに舞い戻る前に、あの荷物をこの商店で商ったと想像される。ドライバーはもう何も言わずに私たち旅人も一緒に商店に入って来るよう勧めた。いかにも行きつけの店という風である。

ドライバーの商う品物に関する情報は次のようである——シリアは社会主義国であるから未だに配給制が著しい。エジプトでは今は配給対象が「小麦粉」のみになった。余談だが一九八九年ソ連でベレストロイカの熱い波が巻き起る最中旅したときには、「まだ砂糖だけの配給が残っている(ひとり毎月1kg)」と聞いた。シリアでは「米・砂糖・小麦粉・石けん・油・茶」が今も配られている。配給カード制になっていて値段は政府が押えている。例えば油1ℓは二十リラ(一リラは二円)。手配できる伝があれば砂糖(メキシコ産)も大量にトルコに流れていくとも聞いたので、

タクシードライバーはトルコから持ち込むよりシリアから持ち帰る方が利益が多いようである。私はこの事態を耳にしてドライバーはトルコ出国・シリア入国よりもシリア出国・トルコ入国の方がより気苦労が多いのではないかと想像した。

ドライバーはここで茶・一〇kg×二包、砂糖五〇kg、粉石けん六箱を仕入れて車のトランクに積み、毛布をしっかり掛けてその上に私たち旅人の荷物を配した。この商店の表側は広いガラス窓になっていて、例えば女性物サンダルや子ども用図画帳、中身は理解できなかったが箱入りの品物などが少々並べられているだけで極殺風景な構えである。店主は男性独りで、奥の部屋はやはりポツンと粗末な寝床と椅子一脚のみであった。商品（ザル）を冷やすクーラーが作動している一方で、奥の部屋の明かりにはガス燈（ボンベに取り付けたもの）が、また分銅式秤りも捉え付けられている。

タクシードライバーと店主は交渉話が弾んで品物の受け渡しを済ませたが、実際に金銭のやり取りはなく後日清算となるらしい。お目あての商品を積み込んだ後は、明らかにドライバーは活気を取り戻して走り出した。

(六) シリア＝トルコ国境越え（復路）

● シリア出国・国境検問所前後

このあたりは乾燥地であることに変らないが、人家・人影も多くなり道路もいく筋も交叉している。トラックに山積みした土砂の上で懸命に踏み固める子も居れば、二m余の木枝に股がって遊んでいる子もいる。この男児の遊びは

所謂「馬乗り遊び」で古くアジア地域では笹竹で、欧米では馬頭を彫って飾った棒に股がって走りまわるのだが、今では昔遊びの類に属すと思われるものがシリアの子どもの達の間でなお息づいているという事実は、彼らの生活が相変らず以前の暮らし方を継続させている証しである。

寒い冬期には仕事も減り、人々は有り余る石を積んで囲い造りや増築をするという。トルコの知人宅でもそういう半分完成の家が次の冬を待っていた光景を思い出す。また開発が進行するにつれ牧畜を営む人々はかなり遠方に移動しなければならず、山羊や羊の放牧そのものが次第に難しくなってきた。

程なく車はシリア出国管理敷地内に着いた。毎回の如くドライバーと私たち旅人は別れて各々の出国手続きに取り掛った。私たちの手続きは真に簡単で、旅券のいちべつで終了。思い返すとシリア入国時の旅人の検問も実に簡単で必要書類提示のみであつたから、出入国あわせて旅券検問に関する難しさは無かつたということになる。

ただ入国オフィスの殺風景さに比べて出国オフィスの壁には沢山のポスターが貼り連ねられており、その絵の表現するところが社会思想を含むものとして大変興味深く感じられたので書き留めたい。

その一枚一枚はかなり大きな絵で、各々手前と背後に二つの世界が描き分けられている。中央の絵は、鉄かぶとの兵士が剣と天使のような翼（つばさ）を背中に持って勇ましく炎の中に立つ姿で描かれているが、兵士の背景には馬に乗った男が人々を鞭打ち、赤子を抱いた母親が逃げ迷い、顔を覆って嘆き悲しむ老人の姿が冷たい色で描かれている。またある一枚の絵には、幸せそうな市民の群像（上半身の）が彩かな色彩で描かれている——稲穂を抱え布をかぶった男性丸々と太った赤子を抱いた母親、鉄かぶとを被った工事の男たち。しかしその背景には兵士、本を抱えた学者像が沈んだ色調で描かれている。また綿花の花いっぱい絵の背景には、ダム、工場、高層ビル、鉄塔と送電線が描かれて

いる。

場所がら撮影ができないが、これらの絵はこれからのシリアが大統領の強い支配下にある軍隊に守られることによって、市民に明るい将来を約束していることを強く印象つけようとしていると見うけられた。

さてドライバーも戻ってきたのでまずは第一関門は通過したことになる。ただタクシーが専用の検問所でのように検閲されたかは決して明かさないのである。私たち旅人にサイドビジネスの事実を間近に見られているのだから「いいじゃないか」と私などは思うのだが、陽気に振まっけていても非常に用心深く神経質でそして秘密主義である。

皆揃って車が動き出した時には正直ほっとしたが、まだスピードも出ないうちに目の前に格子の門が現われ、止った。ここでは私服のシャツ姿の男性が車の前に立ちはだかった。これは第二の検問所なのだろうかと思った瞬間にタクシードライバーは運転席の窓を開けて二、三枚の札を渡した。どう考えても私服の中年男性がただ簡単な門扉を開閉するだけで、何ら料金表示もないのに少額の現金を手渡しするというのは、係官たちの私設通過関としか言いようがない。一連の行為はすべて黙って行われた。その（私設）第二検問所を通過すると今度は本物のゲートが現われた。ここでは制服の係官がドライバーと言葉を交わした後、車内の旅人たちをじろりと見てGOサインを出した。何回も検問された割には時間はかからなかった。

●再びトルコへ——神経質な旅券検問——

シリアを出国してトルコ入国検問所まで再び緩衝地帯を走る。三日前に走った往路のすぐ近くを走っている筈であるが、目の前の光景は全く異なり、ゴツゴツした岩が左右に迫る荒涼とした谷底のような道をうねりながら通りぬけ

る。距離は往路と同じ一〇km位であるが、見晴らしが悪いと退屈なものだ。話題を見つけて、シリア経済が世界のそれと連動しにくいあたりを「両替え」の話にかこつけてぐちを言う——ガイドブックに書いてあるレートは変動などせずに、どうも自分の国用に決めているようだ。大体市中に「CHANGE」など見当らず、銀行で正式にやれば五分の一位になってしまう。シリア・リラ四〇—四〇〇〇というのも闇値ですれば六〇〇〇位になるなど、まだまだ経済が開放されないあたり「わからない事尽し」だと言って、お互いに体験したことや聞き込んだ事など披露し合って時間つぶしをする。

岩場の道走って再びトルコに戻って来た。いつも通りタクシーは専用の入国オフィスへと走り去った。ここでも私たち旅人にはタクシーがどのような入国審査を受けているのかは知る方法はなく、このすべての国境越えの検問所でタクシードライバーが越えた検閲に関しては秘密のベールの向う側に隠されてしまったのである。タクシーが戻るまで今回はいつになく時間がかかり、私たちは折から照りつける強い陽差しを建物の陰に身を寄せてのがれ、じっと待った。往きのトルコ出国の時に見たのと同様に、シリア向けの国境域には沢山の大型車輛が列をなしている。

シリアからの入国に対してトルコ側が神経質であることは、まずタクシードライバーの入国が意外に手間取ったこと、そして私たち旅人三人の旅券検閲が占めて五回にも及んだことから想像できる。場所を変え係官を変えて何回もパスポートの提示が求められ、その度するどい眼差しで入国者の検閲がなされたが、私たちは単なる旅人。全行程は一時の余りもなかった。私たちはバスや乗合いタクシーを選ばずに個人でタクシーを雇い国境越えを試みた。そのために私たち旅人の国境への挑戦は極めて順調運んだが、タクシーのサイドビジネスという望外の体験がくっついてきた。考えてみればタクシーのトランクに一体どれだけの荷物が積めるか、その量は高が知れている。「タクシーのサ

イドビジネスとは本当は何だったのだろうか」と考え込んでしまった。

(七)「国境越えの旅」の終点

トルコへの入国が成功すること、タクシーは全速力で国境の町アンタキヤに戻ってきた。ここが旅の拠点であり、私たちは荷物を保管してくれているレストランの前まで来てタクシーと別れた。別れ際に片道料金（八千円位）とカラート・サマーン寺院跡行きのオブション料金三〇ドルを支払った。決して好感の持てるドライバーではなかったし、彼の方も好意的に動いたわけでもないのに、別れ際にはポケットや財布に残っていたシリア紙幣や小銭を気前よく全部渡してしまった。少しは記念に残しておけばよかったと後で思った。

こうして私たち旅人の国境越えはいろいろな思いやメモを残して終ったのである。預けてあった荷物を引き出してから遅いアラブ風の軽昼食を取ると、日暮れまでに少しでも友人の待つ山間部の町へ近づくようにとバスを探した。その夜私たち旅人三人はバスを乗り継いで海沿いの道から山へむかい、メルシン迄辿り着いた。一夜明けたら早速にレンタカーをして、さらに北へ進み山間部の農場で私たちを待つ大農家一家のところへ急ぐことにした。このトルコ農家の一家の取材は、他のアジア地方で集めた取材資料と共に「アジアの友人…大家族の親から子に伝えるもの」として後日報告したいと考えている。

おわりに

陸路で国境を超えてみて私は大変得がたい好感をシリアに直接感ずることが出来た。トルコとシリアは必ずしも仲のよい関係には無く、物々しい緩衝地帯を挟んだ国境線でお互いににらんでいるが、その一方でシルクロード時代以来の親しい交流が続いている不思議な間があることがわかった。

本稿をまとめるにあたって私は中東事情に精通しておられる本学・平山健太郎先生（白鷗大学 経営学部教授）からトルコ・シリアの関係についてまさに御前講義をいただいた。ヨーロッパやアメリカと複雑にからんで利害を追うアラブ諸国のうちの二国の国境事情を旅日記風に考察するのはとてもおもしろいと助言を戴いた。

またこのたびの国境越えのリーダーであるK氏、小谷野晃氏との出会いは、平山健太郎先生が一九九七年に提案して下さった「エジプトで心理学者に会う」旅で実ったもので、先生にはこの場をお借りして心からお礼を申し上げたいと思います。また化学者Nは、旅の全行程で食物・香辛料・植物などの調査を全て引き受け、旅を名実共に味わい深いものにしてくれたことを心から感謝したい。

最後に小谷野晃氏にもう一度深く感謝の気持を述べて戴きたい。地理学者あるいはアラビヤ語や宗教学研究としての顔の外に、旅人Kとしての素顔に触れ、氏の並々ならぬ強靱さとやさしさに感激した。これからも長く旅人としてご教示を頂戴したい。

（一九九・一 完）

（本学法学部教授）